〔論文〕

半過去形のアポリア

市 川 雅 己

Des apories de l'imparfait

Masaki Ichikawa

Résumé

Nous avons déterminé la fonction de l'imparfait en tant que cette forme verbale construit des coordonnées semblables à celles du temps de l'énonciation mais dont les coordonnées seraient créées ailleurs qu'au moment de l'énonciation. De cette fonction, il résulte que l'imparfait n'est pas essentiellement un temps du passé et que son aspect est indéfini à l'encontre des idées reçues.

Nous avons donné à chaque emploi de l'imparfait, un principe explicatif à partir de sa fonction. C'est cette valeur d'explicabilité même qui montre l'adéquation de sa définition.

はじめに

標題の「アポリア」には哲学的意味はなく、単に解決困難な問題という程の意味である。

本稿の目的は、半過去形の多岐にわたる用法が、我々が市川(1988)で既に提唱した半過去形の機能により整合的に説明できることを主張しようとするものである。

この動詞形に関するこれまでの膨大な論考には大別して、1．この動詞形を本質的に過去時制の一つとする立場（過去説）と、2．この動詞形の本質的機能が、ある場合には過去時制として発現し、別の文脈では婉曲や反実仮想の仮定や他の種々の働きをするものとして現われるとする立場（非過去説）とがある。前者の過去説を主張するのはImbs(1960) 等であり、後者の非過去説をとるのはDamourette & Pichon(1911－1950)、Ducrot(1979)、Le Goffic(1986)等である。ラテン語の未完了過去形からフランス語の半過去形が生じたという通時的視点からすれば、ラテン語の未完了過去形は過去時制

の一つと明らかに考えられるので、前者の立場にたつべきだということになろうが、共時的視点からすれば、この二つの立場の中どちらの立場にたつべきかは論証困難であり、公理的にいずれかの立場を是としてそれに依ってたたざるをえない。両者のいずれの立場が優れているかは、この動詞形の多岐にわたる用法をどちらがより整合的に説明しうるかにかかっている。我々は市川(1988)以来一貫して後者の非過去説の立場から種々の用法を説明しようとしてきた。以下の第1節では我々の提唱してきた半過去形の本質的機能について述べ、第2節以降でこの機能から各用法がどのように説明可能かをみてゆく。

1．半過去形の本質的機能

市川(1988)は、半過去形の機能を次のように規定する。

（1）半過去形は「発話空間（moi-ici-maintenant）とは異なる位置に発話空間とは別個の空間（coordonnées）を構築する。」

発話空間（moi-ici-maintenant）とは異なる位置とは、発話空間とは別の位置に発話空間と同様の座標を構築するという意であり、ある文脈の下では時間軸上、過去の位置に、別の文脈では過去の位置ではなく発話空間とは別のどこかに空間を構築するということである。

（2）Il *était* une fois un roi et une reine.
（3）S’il *faisait* beau aujourd’hui, je me promènerais.

（2）では時間軸上、過去の位置に座標が設定されるのに対し、（3）では過去の位置ではなく、発話空間とは別のどこかに発話空間と同様の空間が誂えられ、その空間においては［il-faire beau］であることが記述されるのである。

半過去形の機能をこのように規定すれば、半過去形は本質的に過去時制であるわけではなく、ある文脈下でこの機能が過去時制として発現するということになる。また、そのアスペクトは「継続相」ではなく、「不定」であり、

半過去形があるアスペクトを示すように見えるのは、それが置かれた文脈の結果であると考える。これは、現在形のアスペクトが不定であると考えるのと並行的である。SERBATの主張するように、現在形は他の時制の守備範囲から外れた部分を受け持つ埋め草的な存在なのである。その種々の用法を検討すれば、現在形が定まったアスペクトをもたぬことが観察される。半過去形は一部の用法とアスペクト不定ということを現在形と共有すると考える。

以下、各用法が（1）の半過去形の機能からどのように説明されるか検討する。

2．この機能による諸用法の説明

2．1．仮定節中の半過去形（imparfait d'hypothèse）：非過去の位置に空間を構築

（4）S'il *faisait* beau aujourd'hui, je me promènerais.

（5）S'il *avait fait* beau ce jour-là, je me serais promené.

（6）Si j'*étais*（de）toi, j'irais lui parler franchement.（LEBAUD 1994）

（7）Raphaël *votait* socialiste, Delphine votait écolo.（ibid.）

（8）Si Raphaël *votait* socialiste, Delphine votait écolo.（ibid.）

上記（4）（6）（7）（8）のような仮定節中の半過去形[1]についてBRES（2005）は従来の説明を6通り紹介している。

（9）1）valeurs modales は valeurs temporelles とは独立に存在

2）antéiorité abstraite et notionnelle（GUILLAUME）：仮定節は帰結節より論理的に先行

3）dérivation（IMBS）：le temporel → le modal

4）vision sécante（WILMET）：*si* impose un début de réalisation du procès à venir

5）toncal（DAMOURETTE-PICHON）

6）approche en termes temporel et aspectuel（GOSSELIN）

（BRES 2005）

BRESがおおむね正しく批判するように、１)のように半過去形のこのような法的価値を時制的価値と別個に扱うのは言語学的敗北であり、２)のpsychomécaniqueな説明は他の過去時制ではなく何故半過去形が用いられるのかには答えていず、３)の時制的価値から法的価値への拡張説は、何故逆方向の拡張が存在せぬのかに答えない。４)のWILMET説と６)のGOSSELIN説の主張するところは我々には意味不明である。５)のtoncal説、すなわち半過去形はmoi-ici-maintenantを起点とせぬ（=toncal)、toncal purであり、noncalと対立するという考え方は、彼らの立論の枠組みの特異性を別にすれば(1)に示した我々の論と近しいものである。

半過去形が、非過去で発話空間と異なる位置に空間を構築し、そこで事態を記述することにより、発話空間にいる話者、聞き手には現在事実に反する反実仮想（文脈によっては未来の起こりそうもない事態）の読みが生じるのである。

（５)のように、過去事実に反する反実仮想の方は半過去形の完了形である大過去形が受け持ち、発話空間とは別個の空間を過去の位置に構築し、そこで事態を記述することにより、現実に生起した過去事実とは異なる事態を仮想させることになる。

２．２.愛情表現の半過去形（imprfait hypocoristique)：話者の愛情表出のための空間を誂える。

以下に典型例を挙げる。

（10）Ah! qu’il *était* joli joli, mon petit Maurice!（WAGNER & PINCHON 1962）

（11）Il *faisait* de grosses misères à sa maman, le vilain garçon.
（DAMOURETTE & PICHON 1911-1940）

（12）Comme tu *pleurais* fort! comme il *était* triste!（WILMET 1976 in SATO 1990）

この用法の特徴は次のようにまとめられる。

（13）ｉ）発話者は女性、特に母親である。

ii）共発話者は幼児、ペット等（共発話者として十全な資格をもたない）である。

iii）主語は通常、3人称に置かれる。

iv）愛撫し機嫌を取ろうとする意図から用いられる。

（d'après SATO 1990）

(12)は同一の幼児を指示しながら、2人称主語から3人称主語への転換が見られる興味深い例である。

この用法は、半過去形が話者の愛情表出のための特別の空間を誂えるためであると説明できる。話者専用の空間であるから、所謂「聞き手（共発話者)」は3人称で表わされることになるのである。

2．3．遊びの半過去形（imparfait préludique）：遊び（～ごっこ）のための空間を構築

（14）Moi, j'*étais* le cowboy, toi, tu *étais* l'Indien.

（15）Alors tu *étais* la maman et j'*étais* le bébé, j'*avais* faim...（LEBAUD 1994）

ベルギー語法によく見られるという、遊びの前の役割の割り振りを行うこの用法も、仮定節中の半過去形と同様、半過去形が遊び（～ごっこ）用の仮想空間を構築すると考えれば整合的に説明可能である。

3．物語の半過去形（imparfait narratif）[2)]

節を改めこの用法について論じる。

3．1．用例と特徴[3)]

以下がこの用法の典型例である。

（16）Vingt jours avant moi, le 15 août 1768（sic), *naissait* dans une autre île, à l'autre extrémité de la France, l'homme qui a mis fin à l'ancienne société, Bonaparte.　（Chateaubriand, *Mémoires d'outre tombe*）

（17）Quatre heures après l'annonce de la mort de M. Brejinev, le comité central ainsi que le Conseil des ministres *assuraient* à la radio et à la télévision vouloir continuer la politique étrangère du président défunt, notamment en matière de détente et de désarmement.　（*Le Figaro,* le 12-11-1982）

（18）A la 33e minute, Dremmler *descendait* Tigana ; à la 39e minute, Six *se prenait* de querelle avec Schumacher ; à la 40e Genghini abattait Kaltz et l'arbitre lui *infligeait* un carton jaune.（J.-P. Lacour, *Le Figaro,* le 9-7-1982）

（19）Il *était* une fois une belle princesse que sa marâtre jalousait...

（LEBAUD 1994）

この用法の特徴を（VETTERS 1996）は次のようにまとめている。

（20）ｉ）単純過去形に常に交換可能
　　ii）時の表示が前置されたときにはこの半過去形が好まれ、後置されたときには単純過去形が好まれる。
　　iii）意味上、終点をもつ動詞（verbes téliques）に用いられる。
　　iv）物語の筋を進める。
　　ｖ）状態動詞に用いられると起動相（行為の始点）を表わす。
　　vi）時の表示はなくてもよい。

（d'après VETTERS 1996 in LABEAU 2005）

一般の半過去形が、主要な事件を記述して物語の筋を進めるのではなく、背景描写を受け持つ副次的な役割を担うのに対し、物語の半過去形は常に単純過去形と交換可能で主要な事件を描き物語の筋を進め、多くの場合、時の表示を伴うのである。時の表示の仕方は、(16)の年月表示、(17)の時間の隔たり、(18)のスポーツ記事によく見られる試合の経過時間等様々であり、(19)のように存在しない場合もある。(18)の試合経過の記述では、この半過去形が連用されるという特徴がある。

3．2．文体的効果

この用法のもつ文体的効果として、物語の現在形と同じく事件を生々しく描写するということがよくいわれるが実はそうではなく、仏語母語話者ならではの直感に支えられた次のLe Goffic（1995）の主張通り、あたかもコマ送りのように事件を描写するというのが正しいと思われる。特にこの半過去形が連用される(18)にそれがはっきりと現われるであろう。

（21）Si（...）plusieurs imparfaits de ce type sont agencés en séquence, comme on peut en rencontrer dans certains types de prose（articles de journaux, romans policiers）, la séquence ressemble alors à un film tourné avec une caméra rouillée, qui procéderait par à-coups, par soubresauts, d'une vue statique à une autre, sans livrer la représentation normale et fluide du mouvement que donnerait une succession de passés simples　（Le Goffic 1995）

この文体的効果は、半過去形により空間が物語の流れに位置付けられて（次々に）構築されると考えることにより初めて整合的に説明されるのであり、他の考え方では十全な説明原理を与えることは出来ないのである。

(19)のように物語を開く半過去形（物語の半過去形中、特にimparfait d'ouvertureと呼ぶ研究者もいる）は、同様の文体的効果をもちつつも、これから語られる物語のための特別の空間を誂える働きをしていると説明できよう。

4．気付きの半過去形：「外的ファクター」の時点（＝発話時）に空間を構築

（22）a（確証を得て）Tu *avais* raison.

b（見つけて）Ah! Vous *étiez* là.

c（待ち人が来て）Je t'*attendais*.（阿部1989）

（23）（確認して）Je m'en doutais.

この用法で、同一の状況（聞き手の正しさ、聞き手の存在等）が気付きの後も存続するにもかかわらず、何故半過去形が用いられるかは、半過去形が「外的ファクター」（阿部ibid.）と呼ばれる気付きの時点（＝発話時）に空間

を構築し、誂えられたその空間で気付きの内容を述べると考えれば整合的に説明可能である。

5．思い出し・確認の半過去形

（24）a Ah, zut! Demain soir, il y *avait* un bon film à la télé.（LEBAUD 1994）
　　b（その時刻より前に）Ton avion *partait* à 16h30?（BRES 2005）

（24a）の思い出しの用法で未来の状況を述べるのに何故半過去形が用いられるかは、前項の気付きの場合と同様に、思い出した時点に半過去形が空間を構築し、誂えられたその空間で思い出しの内容を記述するからであると説明できる。空間が特別に誂えられるということの結果として、思い出しに伴う「しまった、まずい！」という感情が表出されるのである。

BRES（2005）が同様のものとして挙げている（24b）は、Tu m'as dit que 等の主節が省略されたもので、後述の時制の一致の際に現われる半過去形とみなすべきと考える。

6．夢の描写の半過去形：発話空間とは別個の「夢用」空間を構築

（25）Dans mon rêve, je *promenais* dans une vaste forêt, j'*avançais* à vive allure sur un chemin un peu boueux, je n'*étais* pas seul mais ce n'*était* pas toi qui m'accompagnais...（LEBAUD 1994）

この用法も半過去形が夢用の空間を誂えていると説明できよう。

7．丁寧の半過去形

7．1．婉曲の半過去形（imparfait d'atténuation）：話者が願望するための空間を構築

（26）Je *voulais* te dire quelque chose pendant que nous sommes seules.
（LEBAUD 1994）

（27）Je *venais* vous demander si vous ne pouviez pas baisser un peu le son.
（SCHOGT 1968 in 渡邊 2006）

この場合も半過去形が、後続する具体的な願望内容を述べるための空間を発話時に構築すると考えられる。

この場合ANSCOMBRE（2004）の指摘にある、半過去形に置かれる動詞に強い制約があり、vouloir, venir, désirer, chercher 等のみ容認されるという重要な観察に、どのような説明原理を与えることが可能かは、更なる考察を要し別の機会に譲らざるをえない。

7．2．市場の半過去形（imparfait forain）：空間構築による《décentralisation》

（28）Et la dame qu’est-ce qu’elle *voulait*?（LEBAUD 1994）

この用法は、別の文脈では軽蔑にもなりうるというLEBAUD（ibid.）の指摘、本当に丁寧さが表出されているのかという、ある仏語母語話者の直感に見られるように、半過去形が発話時に構築する空間で客や、場合によりその他の人物に言及することによって、話者のいる発話空間から当該人物を《décentraliser》するのである。décentraliserされた人物はしたがって、ある文脈下では丁寧に扱われ（市場の半過去形）、別の文脈では軽蔑の対象となるという正反対の 2 方向の意味を生じるのである。

この場合もANSCOMBRE（ibid.）の次の 2 つの指摘に答えるのは、次の機会に譲らざるをえない。

1）やはり使用される動詞が falloir, vouloir, avoir besoin, souhaiter 等に限られるという強い制約があるのは何故か。
2）店内に入って来たばかりの客に使えないのは何故か。

後者は一見、半過去形＝過去説に有利な観察のようであるが、この半過去形はその名称にもあるように、もともとしっかりした商店ではなく、露天の市場のような場で発話されるものであることを考えれば、店内に入るという状況下では本来使いにくいのではないかと考えられる。

8．反実仮想の半過去形：空間を構築してそこで非現実の事態を述べる。

（29）L’instant d’après, le train *déraillait*.（Le Goffic 1986）（反実仮想の読みで）

この用法も、時の表示の時点に半過去形が反実仮想を述べるための空間を構築する、逆にいえば半過去形が使われていることから、特別の空間が誂えられて反実仮想が述べられているはずだと聞き手に感じさせるものであると考えられる。過去に現実に起こった事態を述べるという読みもあるという点で、（7）と同様の用法と考えられよう。

9．知覚動詞・言明動詞の半過去形：主節時点に空間を構築

（30）J’ai vu que Petit *passait* le ballon à Zidane, qui *marquait* un but.（Vet 2005）

（31）Le matelot, debout au pied du mur, *disait*：——Beau temps, monsieur.（Maupassant）

（30）では主節の動詞時制が表わす時点に、（31）では例文中には現われていないが前文脈の動詞時制が表わす時点に半過去形が空間を構築し、従節の内容、あるいは具体的な台詞が記述されると説明できる。

10．時制の一致の半過去形

（32）Sylvie a dit qu’elle *venait* en voiture.

この用法も前項と同様に、半過去形が主節時点に空間を構築し、主節と同時点の従節の内容を記述すると考えられる。（32）で従節に主節と同じ複合過去形を用いると次々に継起し完了する事態を表わすことになってしまい、主節と従節との同時性が失われてしまうために、複合過去形は容認されないという文法規則が出来たわけである。

11．結論

これまで見てきたように、半過去形の本質的機能についての我々の規定、

（１）半過去形は「発話空間（moi-ici-maintenant）とは異なる位置に発話空間とは別個の空間（coordonnées）を構築する。」

により、半過去形の多岐にわたる用法を整合的に説明可能であることを示した。

冒頭に記したように、他の諸説によるよりもより整合的に種々の用法を説明可能であることこそが、我々の半過去形の規定の正当性を示すものとなるのである。

本文中に触れたなお残る問題点に妥当な説明原理を与えることは、次の機会を俟つことにする。

注

１）（７）は実は、（８）と同じく反実仮想の読みと現実の事態の記述の読みと２通りに曖昧である。接続詞siが仮定の読みを明示的に示す。

２）この用法の様々な呼称については LABEAU（2005）の Annexe : Appellations を参照。

３）この物語の半過去形について、BRES（2005）はすべての半過去形が継続相のアスペクトをもつという自説を首尾一貫させるために、DE VOGUE（1999）が次例を正しく容認不可としているのを否定し、容認可能であると強弁している。

（a）Il était au plus mal. Trois jours plus tard, il *mourait*. Nous étions désemparés, les infirmières s’affairaient autour de lui, tout le monde s’attendait au pire. Pourtant le miracle eut lieu. : il récupéra.　（DE VOGUË 1999 in BRES 2005）

そして単純過去形に交換された次例は容認不可としているのである。

（a’）*Il était au plus mal. Trois jours plus tard, il *mourut*. Nous étions désemparés, les infirmières s’affairaient autour de lui, tout le monde s’attendait au pire. Pourtant le miracle eut lieu. : il récupéra.　（ibid.）

しかし何人かの仏語母語話者に尋ねてもこの判定は明らかにおかしく、（a）は動詞を*se mourait*に代えて初めて容認可能となるのである。

ところで半過去形が物語の半過去形か過去を表わす通常の半過去形かは、半過去形それ事態が決めるのではなく、置かれた文脈により決定されるというBRES（ibid.）の主張は正しく重要である。

（b）Un quart d’heure plus tard, M. Sigisbert *entrait* chez moi et me contait son aventure.
（TASMOWSKI-DE RYCK 1985 in BRES ibid.）

（b’）Un quart d’heure plus tard, M. Sigisbert *entrait* chez moi quand un coup de feu l’abattit sur le seuil de la porte.　（ibid.）

（b）は物語の半過去形で我が家に入るという行為は完結するのに対し、（b’）では背景描写を受け持つ通常の半過去形により記述された同様の行為は、単純過去形により表わされた突発事件により完結することを許されぬのである。

Références

ANSCOMBRE, J.-CL.（2004）《Imparfait d'atténuation. Quand parler à l'imparfait, c'est faire》, *Langue française*, 142, pp.75-99.

BRES, J.（2005）:《L'imparfait : l'un et/ou le multiple? / A propos des imparfaits "narratif" et "d'hypothèse"》, *Cahiers Chronos*, 14, pp.1-32.

DAMOURETTE, J. & PICHON, E.（1911-1950）*Des mots à la pensée, Essai de grammaire de la langue française*, t.V., d'artrey.

LABEAU, E（2005）《Mon nom est narratif : imparfait narratif》, *Cahiers Chronos*, 14, pp.79-102.

LEBAUD, D.（1994）《L'imparfait, analyse linguistique en vue d'une conceptualisation en classe de FLE》, *Le français langue étrangère à l'université, théorie et pratique,* Actes du Colloque Internaitonal de Varsovie,25-26 novembre 1993, Instytut Romanistyki, Uniwersytet Warszawski, pp.217-230.

LE GOFFIC, P.（1986）《Que l'imparfait n'est pas un temps du passé》, *Points de vue sur l'imparfait,* Centre de publications de l'Université de Caen, pp.55-69. ――（1995）《La double incomplétitude de l'imparfait》, *Modèles linguistiques*, XVI, 1, pp.133-148.

SATO, F.（1990）:《Sur l'imparfait《hypocoristique》》, *Sur les verbes français*, Hakusuisha, pp.103-123.

SCHOGT, H. G.（1968）Le *système verbal du français contemporain*, Mouton.

TASMOWSKI-DE RYCK, L.（1985）《L'imparfait avec et sans rupture》, *Langue française*, 67, pp.59-77.

VET, C（2005）《L'imparfait : emploi anaphorique et emplois non anaphoriques》, *Cahiers Chronos*, 14, pp.33-44.

VETTERS, C.（1996）*Temps, aspect et narration*, Rodopi.

DE VOGUËE, S.（1999）《L'imparfait aoristique, ni mutant ni commutant》, *Cahiers de praxématique,* 32, pp.43-69.

WAGNER, R. L. & PINCHON, J.（1962）: *Grammaire du français, classique et moderne*, Hachette.

WILMET, M.（1976）: *Etudes de morpho-syntaxe verbale*, Klincksieck.

阿部　宏（1989）「je t'attendais 型の半過去について」、『フランス語学研究』第23号、pp.55-59.

市川雅己（1988）「半過去の本質的機能について――「物語の半過去」(imparfait narratif)を通して――」、『筑波大学フランス語・フランス文学論集』第５号、pp.81-93.

―――（2003）「-ais, -ais, -ait, -ions, -iez, -aient の機能」、『フランス文学論集』九州フランス文学会、第38号、pp.21-37.

渡邊淳也（2006）《フランス語の「丁寧の半過去（imparfait de politesse)」と日本語の「よろしかったでしょうか」型語法との対照研究》、『文藝言語研究』言語篇50、pp.41-84.